

「聖霊によらなければ」 I コリント 12章1～3節

細井 茂徳

ペンテコステの日に、イエスの弟子たちみなに聖霊が降りました(使徒 2:1~11)。この出来事は、今日の私たちにも関わりのあることであり、今の私たちをも生かす、真の力となる事象であります。

使徒パウロによってこの手紙が送られた教会のあるコリントは、大きな商業都市で、様々な人種の人々が住み、種々の商売で栄え、多くの祭儀と宗教とが混在した異教的な町そのものでした。その中にある教会なだけに、抱えていた問題も多岐にわたり、その内の一つに【霊の賜物の用い方】がありました。パウロは「**ぜひ知っておいてほしいこと**」と言って、キリスト者としてそれを知らないでいると、せっかく豊かな霊の賜物が与えられても、かえって教会に混乱や対立をもたらしかねないと忠告しています。では、キリスト者が必ず知っておかなければならないこととは何か。それは「**聖霊によらなければ、誰も『イエスは主である』と言うことはできません**」と言います。これは、単なる口先のセリフのことを指して言っているではありません。イエスについて「主よ、主よ」と口先で言うだけではダメなのです(マタ 7:21~23)。コリント教会にいた「**霊の人**」(14:37)が過度に強調していた靈感といったものは、何の保証にならなく、生かす力にもならない。ましてや私たちにとって何の助けにもならないのです。そのようなものでなく、今から2千年前にいた**歴史上の人物「イエス」**に根ざした信仰と、そのイエスを「主」と崇めて服従する生活——そうした信仰と生活との全体が、ここで「**聖霊によらなければ**」できないこととされているのです。つまり、私たちの生活そのものが新しくなってしまうこと、これまでとは全く違う生き方になる、それも以前とはまるで別人のように——主イエスの弟子たちが一変してしまっただけです。それこそが「**聖霊によらなければ**」なしえないことなのです。私たち一人ひとりに、みなさんに、そのような聖霊が降されているのです。